

## 講義 7 :

## 言語はいかに進化したか

認知学習分野 正高信男

疑いもなく人間はサルの仲間属する。しかし動物としては、ほかとは全く異なった特性を持って、地球上に存在している。その人間の人間たるゆえんは、どのようにして、いつ誕生したのだろうか。

こういう問いに実証的科学的立場から、解答を見出そうとする試みが近年、盛んに行われるようになってきた。とりわけ脳科学の見地からのアプローチには、注目すべきものが少なくない。

一つの糸口は、人間がことばをどのようにして獲得するにいたったのかという問題についての研究から得られる。人間の脳には、生まれてのちどういう経験を経ようとも、必ず一つの体系の言語を習得するにいたるメカニズムが遺伝的に付与されている。その形成のための遺伝子もまた、特定されるようになりつつある。

遺伝子を分子遺伝学的な手法によって、その進化した年代を推定したところ、およそ 10 万年前であるという見地が得られることとなった。つまり私たちの祖先は、10 万年ぐらい前によく、ことばを話せるにいたったのだと推測される。

しかも言語の生成を支配している脳の機構は、ほかにもいくつか大切な認知機能を有している。とりわけ、共感すなわち他者の動作やしぐさを目撃した際、そこから相手がどのような心的状態にあるのかを、身体レベルで把握することを可能にする素地を提供していることが、明らかとなってきた。

そして実は共感というひとつの現象を介してのみ、私たちはおのおの「私」という存在を認識することができるのだということが判明しつつある。それゆえ言語の進化、あるいは子どもが言語を獲得することは、個々人を真の意味で人間的にする大変に重要な機会であるということになる。

さらにその遺伝子が支配している神経系が同定されるにいたっている。そのシステムは単に言語ばかりか、自己の認識といった社会性全般の形成に重要な貢献をおこなっている。言語の起源について、言語学のフィールドに身を置く最近の研究者は、言語発声の前段階にある、言語獲得過程に向けた初期発達を調べることの重要性を強調している。

それは社会性の形成と不可分に結びついている。言語は、異なる要素から成る複雑なシステムである。それらは異なった時期に獲得されるだけでなく、入ってくる入力に対しての依存性も状況によって異なるように見える。例えば、言語にさらされるのが遅れると、言語の計算論的側面である文法能力に重大な影響が現れる一方で、言語のシンボル能力的側面である語彙にはゆるい影響しか生じない。言語能力の中に観察されるこうした一連の言語発達過程は、遺伝的にプリプログラムされていると推測する。そのようなシステムの障害となってあらわれていく歴史的経緯についても話す予定である。